

秋

成

日本古典鑑賞講座二十

日本古典鑑賞講座

第二十四卷

秋 成



昭和三十三年九月五日 印刷
昭和三十三年九月十日 發行

(第十五回配本)

定價三三〇圓

編 者 中村幸彦

發行者 角川源義

印刷者 中内あき子

發行所 株式會社 角川書店

東京都千代田區富士見町二ノ七
振替東京一九五二〇八
電話九段 〇一一一〇一一五

落丁・亂丁本はおとりかえいたしません

中 村 幸 彦
編

解説

素人から玄人へ 上田秋成は、まことに日本人好みの作家である。日本人は由來、正統のものより傍系の、清濁合わせもつ重厚なものよりは、純粹ですつきりしたもの、どちらかといえば愛情を持つ。要するに綺麗にそげたものに對する嗜好は、西歐の趣味が入つて久しい今日でも、日本人の中から消えてはいない。いま問題の古典作家も、その文化史・文學史上の位置や人がらや作品のタイプは後者に屬する。小説作家としても、西鶴から馬琴の線上に、國學者としても、契沖から篤胤の線上に、そのままでは乗らない。歌人としても、同時代人の加藤千蔭・小澤蘆庵とくらべて本筋とは認めにくい。言つてみれば、どの面でもよい意味の素人である。しかし歴史の回轉には、素人の介入が大きく玄人の世界を刺戟し、その變革に作用する時期が時おりにおとずれる。秋成が文壇や學界に關係を持つた一七〇〇年代の後半は、徳川封建社會が飽和的になり、各面で既成のものが、進展變化への打開が必要な時代であつた。彼が關係した文學の面だけとつても、享保（一七一六—一七三五）以來の宗匠臭ふんぶんたる俳壇、なお堂上に權威があつた上方歌壇、八文字屋本末期の情性的な作品群。批判力と反俗精神、それも感覺的な部分が多いのだが、その持主であつた秋成は、器用なままに、文學はもちろん茶道における煎茶道の鼓吹などを含めて、それぞれの世界に頭をつつこんでは、今日からみれば清新の氣をふき込んだのであつた。やがて秋成と同じ精神で、相似た行動に出た人の運動が成功して、素人が新しい玄人となつた時、讀本や滑稽本などの新様式の確立、中興俳壇の成立、縣居派や蘆庵系の歌壇が打ち開けた時にも、狷介な性格ゆえもあつて、秋成はまた、その仲間から遊離し、自分なりに純粹にその道を歩いていった。圖式形に言えば、これが秋成の史的なあり方である。



秋成木像（西福寺所藏）

は、みなこの指に關係する。狷介な内柔ながら外剛の性格を持つたのには、出生の祕密と、この不具が秋成の精神にもたらせたものも原因するであろう。この痘の全癒には、大阪北郊加島稻荷の靈驗によるものと、生涯堅く信じていた。すぐれた合理的な思考力の一面、妖怪の實在をうたがわなかったり、靈驗を信じたり、こうした面の持主でも秋成はあつた。

青年時代は放埒な生活も少しはしたが、早く讀書癖を持ち、創作欲もあつた。そうした當時の町家の子息としては普通に、俳諧に遊び、「諸道聽耳世間猿」(一七六六)、「世間妾形氣」(一七六七)の二つの浮世草子を出板した。三代に入つてからは、自己の生活と文學にも疑問をいだき始めた。ちようどそのころ明和八年(一七七二)、三十八歳で火災に逢い、彼の生活が大きく轉換しなければならなくなつた。人生についても社會についても、考えるところが多

生涯と作品 逆算して享保十九年(一七三四)六月二十五

日、彼の言をかれば、父を知らずして、大阪曾根崎に生れた。

田中氏と傳える生母は、その妓家の娘であつたとか、實父は崇禪寺馬場の仇討の生田傳八郎であつたとか、神經質の彼が絶えず氣にした噂が生前・歿後に存するが、いずれも確かめ得ない。四歳、母に離れて、堂島永來町(いまの大阪毎日新聞社のあたり)で

島屋と號し、富有に紙油商をいとなむ上田氏に養われた。若い時は仙次郎、後に藤作と通稱した。かなり自由ながら、一本筋の通つたしつけをうけて生長した。幼年から虚弱で、癩がつよく、ことに五歳の時、惡質の痘をやんで、右の中指、左の第二指が短い不具となつた。剪枝畸人とか無腸とかの號

かつたはずである。これより先、明和三、四年の間か、上方の御番に上つた加藤宇萬俊^{まふし}に入門して、賀茂眞淵流の國學の洗禮を受けた。上方系の國學の礎地の上であつたが、これがこの時に定まつた彼の思想に決定的ともいうべき大きな影響を与えたようである。實生活の方法も改めて選ぶべき彼は、醫業を志した。ために入門した天滿住の儒醫都賀庭鐘^{はつていしむ}も、その博學と見識をもつて影響を与えた。そしてこの中國白話小説を翻案して、新風の小説の口火を切つた庭鐘の塾で、かねがね作つていた怪異短篇小説集「雨月物語」を推敲^{すいしう}、安永五年（一七七六）に刊行した。庭鐘の著述とともに、初期讀本の中核作品であることはいうまでもない。このころは醫術の勉強のため、ゆかりある加島稻荷の社司藤氏の世話になつた田舎住みから出て、大阪市中に開業、かなりの成績を上げたとは自ら言うところである。しかし彼のような神経が細く、狷介な性格には、町醫の業は適當だとは思われない。健康もすぐれなかつたか、その間保養のための遊覽も多い。五十五歳の天明八年（一七八八）、ふたたび加島に退隱して「世ののら者となつて、歌かき文よみて遊ぶ」生活に入つた。生活にゆとりのできた彼が國學と和歌に情熱を持出したのである。本居宣長との論争をも含めて、「歌聖傳」（一七八五）と稱する「人麿傳考」の小さいものから、「安々言^{やすごと}」（一七九二）という古事記偽書説を述べて、加藤千蔭から國賊よばわりされたはげしい論をまですまめていつた。一方、師宇萬俊やその師眞淵の著述を校訂出刊した。早いころの「雨夜物語たみことば」（一七七七）に、「靜舎歌集」（一七九一）、眞淵の「古今和歌集打聽」（一七八九）、「伊勢物語古意」（一七九三）、「縣居歌集」（一七九一）がその中にある。「古意」とともに前の加島住みに門人に講じたおりに作つたと思われるこの物語の註釋「よしやあしや」から、自信ある説を抄記、同名で附録とした。國學という新しい學問に、かなりに野心的に活躍し始めたのである。秋成とは國學、和歌の方の號で、餘齋は三餘齋を上略したもの、ともにこのころから用ひ出した。

彼の妻植山氏たま、法體して瑚璉^{れん}尼は京都の生れ、他にも進める人があつて寛政五年（一七九三）に、生涯の生活の計畫を立てて京都へ、その隠棲を移した。智恩院門前に住むと近くに村瀬榊亭がいた。秋成は大阪のおりから友人

木村兼葭堂^{けんかどう}らと煎茶のたしなみがあつて、栲亭とともにこれを鼓吹し、ために「清風瑣言」(一七九四)を出刊した。國學への情熱はおとろえず、またこの閑人に仕事を依頼する書肆もあつて、上代假名づかいで宇萬伎の説を、一段すすめた「靈語通」(一七九七)を著わし、「落窪物語」(一七九九)・「大和物語」(一八〇五)を校刊、眞淵の著述をついで、枕詞の研究「冠辭考續紹」(一八〇一)をも出した。望まれては正親町三條公則に、「土佐日記」や「萬葉集」を講じもした。「檣の杣」^{さか}にその講義の内容は残り、宇萬伎の「土佐日記解」も、そのようなおりに補訂されていった。「檣の杣」より一段詳かな「金砂」とその附言「金砂剩言」などを文化元年(一八〇四)には著わした。しかし私生活は、京都移居をよるこんだもつかのま、瑚璉は寛政九年(一七九七)に歿し、そののち彼の世話をした貞光なる尼も數年にして逝き、最後の世話を希望した養女も、私の想像では、愛人とともに彼のもとから去つてしまつた。寛政二年(一七九〇)ころから左眼を悪くしていた彼は、右眼をもまた患つた。この不自由の中で、いわば養女のふしだらを、秋成は大きく許して、人生の夕暮をむかえるべく自ら孤獨に入つていつたのは七十歳の享和三年(一八〇三)であつた。

無腸^{無腸(別名)}の號のごとく、外剛で、怒りつぽく、口が悪く、頑固な老人にはしかし、實は内柔で、神經質で、人情家で、一本筋が通つた人柄を理解する人が、幸いなことにその周圍に何人かはいた。晩年の彼は、いたる所でぐちをこぼしている。がそれに應じて下手にあわれみをかけ、手出しをすれば一喝絶交を申しわたされることなど知つて、遠まきに暖かく見守つた人々である。享和の初め三度秋成を迎えて師事し、歿後は墓をいとなんで長く供養した加島藤氏の人々、寛政十年(一七九八)河内日下^{かわちひげ}に眼疾をやしなわせた唯心尼^{みじん}。大阪へ下れば秋成の方から訪問した兼葭堂^{けんかどう}、その才を愛した小澤蘆庵^{あしあん}・十時梅厓^{ばい}・村瀬栲亭など一時の名士もあれば、蘆庵門の誰彼は、たびたび秋成を引き取つては世話をした羽倉信美を初め、こまめに訪いなくさめた後輩たちもあつた。これらの人々のすすめと努力によつて、その歌文集「藤葉冊子」(一八〇六・七)や、書簡文を集めた「文反古」(一八〇八)が相ついで出た。和歌の



南禪寺畔の西福寺に現存する秋成の墓石、
その墓碑銘は友人森川竹窓の筆になる。

弟子もとらず、世俗的な媚のない、佞屈きつくな文章や、流派にとらわれず、よい意味で我流の和歌は、俗受けしなかつたが、「藤箋冊子」のとき賣行うりぎきが悪かつた。しかし大田南畝なんおらの具眼者ぐがんしやを初め、彼の文や和歌を、その變つた書とともに好む者も當時も乏しくなく、數多く残つて、藤井紫影博士編の「秋成遺文」に收まつている。その禮金もいくらか生活の資となつたらしい。

それらの秋成眞まことの者のなかには、「雨月物語」の讀者もあつて、彼に小説の作を慫慂しんようしたらしい。秋成もまた嫌いな道ではなかつた。天明七年（一七八七）には「書初機嫌海かきぞめきげんかい」を出刊し、加島隱棲かしまのりのつれづれには、寛政三年（一七

九一）には、文政五年（一八二二）おかれて出版された「癩癖談くすりのかたまり」を書いている。ともに諷刺的な「雨月」とは違つた風の作品ながら、秋成的體臭は脈々と續いている。俗に言えば、下地は好きなり、御意はよしで、寛政末年（一八〇〇）から書き出した雅文體小説は、「藤箋冊子」に收まる「月の前」「劔の舞」、單獨の「鴛鴦行うんやうぎやう」「背振翁傳」「ますらを物語」（仮題）もあるが、文化五年（一八〇八）、中十篇を集めて「春雨物語」とし、この物語はその歿する年まで推敲した。文化年間（一八〇四—一八一七）に入ると、肉體的にも精神的にも死のせまつたことを感じたようである。享和二年（一八〇二）、死の用意

はしたようであるが、文化四、五年、死を前にしての行動が目立つ。一方で死後の思惑から、原稿類を古井に投じたかと思えば、一方では生涯の著述で所々に述べた考えとも重複するが、彼が關心あつたあらゆる事象についての見解を、ほしいままな口調で放言した態の隨筆「膽大小心録」を書いた。その抄記の異本には「書をきの事」と自ら記した。自畫像をおそらくは大通寺であろうが收めたり、五年の七月二十一日には、ほんとうに書いた書置が残っている。曾禪^{そねん}好忠^{こうしゅう}に學んで「毎月集」とて三百六十首の詠歌集を作つたのも、「春雨物語」をまとめたのも、今から思えば死の準備であつたと解される。そして百萬遍屋敷の羽倉信美の家で歿したのは、文化六年（一八〇九）六月二十七日、七十六歳であつた。墓はかつて住んだ南禪寺畔の西福寺に生前からの依頼で、十三回忌に經營した。文字は友人森川竹窓、碑文も同じく友人村瀬栲亭の「毎月集」のために作つた序をあてて、現存している。

近代的な近世作家 秋成の存在は、近世中期なる特異な時代に社會を遊離し、白眼視し、諸藝に生涯を託した一種の文人として、全面的に把握されなければならない。しかし彼の名を不朽ならしめるものは、やはり「雨月物語」「春雨物語」の二小説作品であろう。初期讀本中にかがやくこの作品は、山東京傳・瀧澤馬琴らの後期讀本を呼び起す歴史的な大きな意義を持つ。それとは別に、和漢・古今の小説に目をさらして自得した寓言説ともいふべき小説觀と、その理論を上廻るまでの表現力をもつてした作品は、あやしい光をもつて、はるかに近代人の胸臆にしのび込み、共感せしめるものを持つている。史上に孤高するものである。といつて文章のはなはだしい重視や構成方法など、何といつても近世的である。いたずらに放縱に近代的な理解に走る前に、秋成とその時代に立つて、鑑賞することが、いつの時代のもあれそうであろうが、古典理解の正道である。それが秋成のほんとうのよさを發見する道と等しいことを信ずる。

目次

解説

中村幸彦

三

素人から文人へ (一三) 生涯と作品 (四) 近代的な近世作家 (六)

本文鑑賞

中村幸彦

三

秋成物語

一五

はじめに (一五) 大阪の町人の學校 (二五) 俳諧に入り俳壇を去る (二五) 中世否定の二つの型 (二七) 現實に徹する文學 (二七) 上方の出版機構 (二八) 古代憧憬 (二九) 孤高の歌人 (三〇) 美的生活を求めて (三一) 宣長と秋成 (三二) 中國小説熟 (三三) 加わる重量感 (三四) 秋成の文章 (三五) 諷刺的作品 (三五) 雅文小説 (三六) 歴史觀 (三七) 秋成における近代的な人間像形成 (三八)

諸道聽耳世間猿

三

繪入讀本の作者 (三三) 南嶺の刺戟 (三三) 共通する態度と

感覺 (三三) 考えさせる結末 (三四)

孝行は力ありたけの相撲取

世相を諷する序曲 (三五) 孝行者の悲喜劇 (三六) 運命は皮肉なもの (三七) 胴慾な親 (三九) まつわりつく貧乏神 (四〇)

雨月物語

三

「雨月物語」の出版 (四一) 雨露月露の物語 (四二) 「雨月物語」の全貌 (四三) 「雨月」の諸性質 (四四)

菊花の約

六

翻案小説の魅力 (四五) 義にいさむ直情の主 (四六) 計算的構成神經の充満 (四七) 菊花の約 (四八) 友待の焦躁 (四九) 死靈の訪れ (五〇) 信義を生かす構成のうまさ (五一) 信義を思う激情 (五二)

淺茅が宿

七

和漢文脈文章の効果 (五三) 秋成の考證癖 (五四) 巧妙な原話への肉附 (五五) 妖筆の研え (五六) 淺茅が宿に昔をしのぶ (五七) 能にならう構成 (五八) 近代小説的な手法 (五九)

蛇性の姪

二八

物語風な出だし (六〇) 會話の巧みさ (六一) 奇しき現實 (六二) 美文「白娘子」の雅文譯 (六三) なまめかしい和文調 (六四) 吉野の花囃 (六五) 妖異の本體 (六六) すき

まじい妖怪味 (二五) 蛇性の煙の物語 (二五九)

癩癧談

「伊勢物語」の撰文 (二四四)、癩癧談の題材 (二五五) 穴を言う (二六六) いたずら人 (二六六) われ一人清めり (二七四)

藤簍冊子

藤簍冊子の編纂 (二七五)

月の前

典據と歴史小説 (二八三) 秋成の歌論 (二八六) 直情家西行の面目 (二九二) 頼朝と歴史の流れ (二九四)

春雨物語

復原を見ぬ短篇物語集 (二九六) 歴史と社會の小説 (二九六)
第二話「天津處女」 (二九七) 第三話「海賊」 (二九七) 第四話「二世の縁」 (三〇〇) 第六話「死首の咲顔」 (三〇〇) 第七話「捨石丸」 (三〇二) 第八話「宮木が塚」 (三〇二) 第九話「歌のはまれ」 (三〇四) 第十話「變囃」 (三〇四)

血かたばら

龍之介・春夫・潤一郎の評價 (三〇六) 古代人の素直を生きる (三〇六) 壓倒する歴史的事實 (三〇六) 息拔きの間奏曲 (三〇六) 日本精神を亂した佛教 (三〇六) 悲劇の帝王 (三〇六)

目ひとつの神

怪異出現の前奏曲 (三〇六) 劇輕な日本の妖怪 (三〇六) 和歌を論ずる妖怪 (三〇六) 神に自説を託す (三〇六)

秋成の窓

二七〇

秋成の思想と文學

二七〇

作家と作品 (三〇七) 小説家から國學者へ (三〇七) 國學の道をわけいつて (三〇七) 歴史小説「春雨物語」 (三〇七) 歌論的小説 (三〇七) 直き古人の心 (三〇七) 戀愛の純粹と勝利 (三〇七) 素朴な變囃の人間像 (三〇七) 買いかぶられた「春雨物語」 (三〇七) 思想的價值と文學的價值 (三〇七) 形象性の退化 (三〇七) 「雨月物語」の造型 (三〇七) 秋成の文學觀 (三〇七) 秋成の反封建性 (三〇七) 追真的描寫と怪異美と (三〇七)

ものがたりざま——秋成の小説觀——中村幸彦

二七〇

秋成の物語論 (三〇七) 道德からの脱出 (三〇七) 蘭洲・眞淵の影響 (三〇七) 近代小説との對比 (三〇七) 秋成の「源氏物語」批判 (三〇七) 作家としての出發 (三〇七)

秋成の國學——その位相——

二七〇

文人の國學 (三〇七) 眞淵・宣長と秋成 (三〇七) 秋成國學の系譜 (三〇七) 宇萬伎と秋成 (三〇七) 對宣長論争 (三〇七) 無聲の琴 (三〇七)

秋の雲——秋成の和歌——

宇佐美喜三八 三九

秋の雲 (三七九) 秋成の歌人的系譜 (三八〇) 秋成の歌の出發點 (三八一) 眞淵の歌の影響 (三八一) 秋成の歌の自在性 (三八三)

秋成の歌の特異性 (三八四) 盜竄 (三八五) あし原ガニ (三八六)

浮世草子の流れ

野田 壽雄 三八

西鶴の出現 (三八六) 西鶴の對抗馬 (三八七) 別の反抗運動 (三八八) 新しい試み (三八九) 西鶴復興 (三八九) 氣質物 (三九〇)

秋成の浮世草子 (三九七)

讀本の流れ

松田 修 三九

乖離の文學から密着の文學へ (三九七) ロマンチズムの意味——自己表白性—— (四〇〇) 主觀の燃焼——馬琴における思想の意味 (四〇一) 趣向——日閉性と開放性と (四〇二)

副業作家から職業作家へ (四〇三) 短篇小説から長篇小説へ (四〇四) 讀者層の變化 (四〇五) 結語 (四〇六)

秋成と中國小説

澤田 瑞穂 三九

「雨月」の漢文序 (四〇九) 剪枝畸人 (四一一) 庭鐘と秋成 (四一二) 讀本の格式 (四一三) 唐話學流行 (四一四) 醫世通言と西湖佳話 (四一五) 借用の痕跡 (四一六) 原作からの距離 (四一七) 世俗性と古典趣味 (四一八) 白蛇物語その後 (四一九)

「蛇性の煙」は凡作か (四二〇)

上田秋成研究史物語

高田 衛 三八

泉禪寺馬場敷討 (三三〇) 詩人と狂氣の間 (三三二) 死後の多幸 (三三三) 幻妖美と古典主義と (三三四) 秋成と讀者 (三三六) ファシズムの嵐の下で (三三九) 戦後の秋成研究 (三四〇) これからの研究 (三四一)

參考文獻

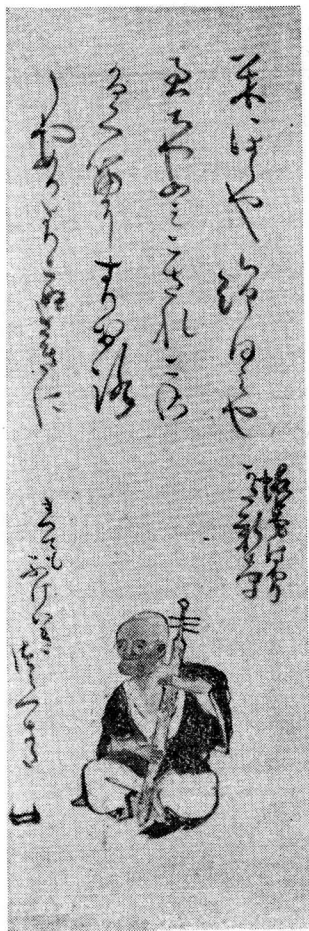
高田 衛 三九

テキスト (三四二) 註釋・現代語譯 (三四三) 研究書・論文集 (三四四) 講座・雜誌論文 (三四五) 參考研究書目 (三四六)

秋 成

本文鑑賞

中村幸彦



秋成自畫像（天理圖書館藏）

秋成物語

中村幸彦

はじめに この講座では自然、「雨月物語」「春雨物語」その他の小説作品が主対象となるであろう。しかし秋成の生涯を見ても彼は單なる小説作家でなかつたし、彼もけつして小説家と呼ばれることをいさぎよしとしなかつたであらう。文學に限つても小説以外に多方面の活躍を見せている。私は、解説で略述した彼の生涯の中から、文學的放浪をクローズ・アップして、その精神の推移をこの「秋成物語」の題で、物語ろうと思う。自然手うすになる部分のおぎないとも、彼の小説作品を解する上に不可欠な準備ともしたいからである。中には考證を要する部分も出てくるであらうが、「物語」では、堅苦しいことは全部省略して、もつぱら話の筋をはこんでゆく。

一

大阪の町人の學校 秋成が書籍らしい書籍に初めて接したのは、當時の大阪の町人の學校であつた懷徳堂ではなかつたかと、想像する。たしかな資料があつてではない。彼の若いころのこの學校の教授五井蘭洲には、若千の敬意を示し、學說上にも従うところがあり、同校の根生いで、同年輩の中井竹山・同履軒（か）とは、お互に言いたいことの言える仲であつたからである。この想像が許されるとすれば、彼と同時代に特異な發達を見せる大阪文化の土壤に、幼い秋成もまた讀書癖をやしなつたことになる。

俳諧に入り俳壇を去る 文學創作の手初めは、彼が屬した中層町人家庭で文學趣味を持つ人としてはきわめて